

新版 指導要文集

しんぱん

しどうようもんしゅう

だいいっしょう

しんじん

きほん

第一章 信心の基本

こんぎょう

しょうだい

勤行・唱題

ゆえ みようほうれんげきよう ごじ とな くどくばくだい しよぶつ

故に、妙法蓮華經の五字を唱うる功德莫大なり。「諸仏・

しよきよう だいもく ほけきよう しよかい みようほう のうかい 知

諸經の題目は法華經の所開なり。妙法は能開なり」とし

ほけきよう だいもく とな

りて、法華經の題目を唱うべし。

(001 唱法華題目抄

しようほつけだいもくしよう

ごんぎよう しようだい  
勤行・唱題 19 ページー2 行)

いちねんむみよう めいしん みが かがみ みが かなら

一念無明の迷心は磨かざる鏡なり。これを磨かば、必ず

ほつしようしんによ みようきよう な

法性真如の明鏡と成るべし。

ふか しんじん おこ にちやちようぼ おこた みが

深く信心を発して、日夜朝暮にまた懈らず磨くべし。

みが なんようほうれんげきよう とな

いかようにしてか磨くべき。ただ南無妙法蓮華経と唱えた

磨

てまつるを、これをみがくとはいうなり。

いつしようじようぶつしよう

(015 一生成仏抄

ごんぎよう しようだい

勤行・唱題 317 ページー14 行)

まよ なや せいめい みが かがみ みが

迷い悩む生命は磨かない鏡のようなものです。これを磨くなら

かがみ しんじつ さと ちえ かがみ

ば、くもりのない鏡のように、かならず真実の悟りの智慧の鏡へ

か ふか しんじん

と変わるのです。深く信心をふるいおこして、昼も夜も朝も 暁

ひる よる あさ あかつき

ゆだん じぶん せいめい みが

も、つねに油断しないで自分の生命を磨かなければなりません。どの

みが ごほんぞん しんけん

ようにして磨けばよいかといえ、(御本尊に) 真剣に

なんみようほうれんげきよう とな しんじん せいめい みが

南無妙法蓮華経を唱え、信心にはげむことが生命を磨くことにな

るのです。

じゆうによぜ さんてん 読

この十如是、三転によまるること、三身即一身・

さんじんそくいっしん

いっしんそくさんじん

ぎ

みっ

わ

ひと

ひと

一身即三身の義なり。三つに分かるれども一つなり。一つ

さだ

みっ

に定まれども三つなり。

(020 一念三千法門

いちねんさんぜんほうもん

勤行・唱題

ごんぎよう

しょうだい

364 ページー11行)

されば、さとさせる解りなくとも、なんみょうほうれんげきょう南無妙法蓮華經と唱となうるな

らば、あくごう悪道をまぬかるべし。

033 ほけきょうだいもくしやう法華經題目抄 みやう（妙の三義の事）さんぎ こと

ごんぎやう勤行・唱題 しやうだい 533 ページー5 行

こはく ちり 取 じしやく くらがね 吸 われ あくごう ちり  
琥珀は塵をとり、磁石は鉄をすう。我らが悪業は塵と  
くらがね

鉄 思 とのごとく、法華經の題目は琥珀と磁石とのごとし。

かくおもいて、常に南無妙法蓮華經と唱えさせ給うべし。  
つね なんみようほうれんげきよう とな たも

033 法華經題目抄（妙の三義の事）

勤行・唱題 533 ページ 12 行  
ごんぎよう しょうだい

だいもく

とな

ふく

はか

見

いちぶはちかん

題目ばかりを唱うる福、計るべからずとみえぬ。一部八卷

にじゅうはつぽん

じゆじ

どくじゆ

ずいき

ごじとう

こう

二十八品を受持・読誦し、随喜・護持等するは広なり。

ほうべんぼん

じゆりようほんとう

じゆじ

ないしごじ

りやく

方便品・寿量品等を受持し、乃至護持するは略なり。た

いちしくげ

ないしだいもく

とな

唱

もの

ごじ

だ一四句偈、乃至題目ばかりを唱え、となうる者を護持す

よう

こう

りやく

よう

なか

だいもく

よう

うち

るは要なり。広・略・要の中には題目は要の内なり。

033 法華経題目抄 (妙の三義の事)

ほけきようだいもくしよう

みよう

さんぎ

こと

ごんぎよう

しようだい

勤行・唱題 534 ページ 15 行

だいもく

とな

ひと

ふくとく

題目ばかりを唱える人の福德ははかることができないほどすばら

と

ほけきようしゆぎよう

しかた

わ

しいものであると説かれています。(さて法華経修行の仕方を分けて

ほけきよういちぶはつかんにじゅうはつぼん

じゆじ どくしゆ

みますと) 法華經一部八卷二十八品のすべてを受持、読誦し、

ずいき ごじ

こうりやくよう

こう しゆぎよう

ほけきよう

随喜、護持するのは広略要のうちの広の修行です。法華經のなか

かなめ

ほうべんぼん

じゆりようほんとう

じゆじ

ごじ

りやく

の要である方便品・寿量品等を受持し、護持するのは、略の

しゆぎよう

いちしくげ

しく

ひと

げ

みじか

修行です。ただ一四句偈（四句をもつて一つの偈をなす短い

きようもん

ごじしちじ

だいもく

とな

とな

もの

ごじ

經文)ないし五字七字の題目だけを唱え、また唱える者を護持す

よう

しゆぎよう

こうりやくよう

ごじしちじ

だいもく

かなめ

るのは要の修行です。広略要のなかでは、五字七字の題目は要

ちゆう

かなめ

中の要なのです。

きよう

いつさいしゅじよう

ごんごおんじよう

きよう

い

しやく

「経」とは一切衆生の言語音声を経と云うなり。釈

い

こえ

ぶつじ

な

きよう

に云わく「声、仏事をなす。これを名づけて経となす」。

おんぎくでん

(095 御義口伝

ごんぎよう

しょうだい

勤行・唱題

984ページー17行)

きよう

せいめいたい

はっ

ことば

おんじよう

経というのはあらゆる生命体が発する言葉、音声のことです。

しょうあんたいし

しきえんぎ

ほつけげんぎ

じよ

ほとけ

おんじよう

章安大師の「私記縁起」(「法華玄義」の序)には「仏の音声は

しゅじよう

きようけ

しよさ

な

きよう

すべて衆生を教化する所作である。これを名づけて経という」と

あります。

がつしょう

ほけきょう いみょう

こうぶつ

ほけきょう

「合掌」とは、法華經の異名なり。「向仏」とは、法華經

あ たてまつ

い

がつしょう

しきほう

こうぶつ

に値い奉るを云うなり。「合掌」は色法なり、「向仏」

しんぼう

しきしん

にほう

みょうほう

かいご

は心法なり。色心の二法を妙法と開悟するを、

かんぎゆやく

と

「歡喜踊躍」と説くなり。

おんぎくでん

095 御義口伝

ごんぎょう

しょうだい

勤行・唱題

1006

ページー16行

がつしょう

ほけきょう

いみょう

こうぶつ

「合掌」とは法華經の異名です。「向仏」とは、

なんみょうほうれんげきょう

がつしょう

しきほう

南無妙法蓮華經におあいしていくということです。

合掌は色法に

すがた

こうぶつ

しんじん

しんぼう

しきしん

にほう

あらわれた姿であり、向仏とは信心の心法です。

色心の二法

せいめい

みょうほうれんげきよう

さと

ほけきようひゆほん

(生命) を妙法蓮華経であると悟ることを、法華経譬喩品で

しやりほつ

かんきゆやく

と

かんきゆやく

しんぽういつたい

すがた

舍利弗が歡喜踊躍したと説くのであり、歡喜踊躍とは心法一体の姿

なのです。

「廻え転てん」とは、だいもく 題目ごじの五字なり。

（095 御おんぎくでん義口伝）

勤ごんぎよう行・唱しやうだい題

1009 ページ 7 行

いま にちれんとう たぐ なんみようほうれんげきよう とな たてまつ もの  
今、日蓮等の類い、南無妙法蓮華経と唱え奉る者は、

よによらいぐしゆく もの ふだいし しゃく い ちようちよう  
「与如来共宿」の者なり。傳大士の釈に云わく「朝々

ほとけ お せきせきほとけ ふ じじ じようどう  
仏とともに起き、夕々仏とともに臥す。時々成道

じじ けんぼん うんぬん  
し、時々顛本す」云々。

(095 御義口伝

ごんぎよう しょうだい  
勤行・唱題 1027 ページ12行)

にちれん もんか なんみようほうれんげきよう とな ほげきよう  
いま日蓮とその門下が南無妙法蓮華経を唱えるのは、法華経

ほっしほん と によらい とも しゆく ひと みろくぼさつ  
法師品に説かれる「如来と共に宿する」人のことです。弥勒菩薩の

こうしん ふだいし まいあさほとけ お まいばんほとけ  
後身といわれる傳大士は「毎朝仏とともに起き、毎晩仏とともに

やす  
に安らかに寝ます。また瞬間瞬間に成道し瞬間瞬間に頭本  
ね  
の  
しゅんかんしゅんかん  
じょうどう  
しゅんかんしゅんかん  
けんぽん  
するのです」と述べています。

いま にちれんとう たぐ  
今、 日蓮等の類い、 南無妙法蓮華経と唱え奉るは、  
なんみょうほうれんげきょう とな たてまつ

だいおんじょう  
「大音声」なり。

( 095 おんぎくでん  
御義口伝

ごんぎよう しょうだい  
勤行・唱題  
1032 ページー2行

いま にちれんとう たぐ  
今、 日蓮等の類い、 南無妙法蓮華経と唱え奉るは、 仏  
ほうけ たてまつ  
に宝華を奉るなり。

(095 御義口伝  
おんぎくでん

ごんぎよう しょうだい  
勤行・唱題  
1033 ページ 9 行

いま にちれんとう たぐ なんみようほうれんげきよう とな たてまつ おおかせ  
今、 日蓮等の類い、 南無妙法蓮華経と唱え 奉るは、 大風  
の吹くがごとくなり。

（おんぎくでん  
095 御義口伝）

ごんぎよう しょうだい  
勤行・唱題 1034 ページー17行

にちれん もんか なんみようほうれんげきよう とな すがた  
いま日蓮とその門下が、 南無妙法蓮華経と唱えていく姿という  
ものは、 大風の吹くようなものです。

ほつけ だいもく しし ほ

法華の題目は獅子の吼うるがごとく、余経は余獣の音の

しよきようちゆうおう

しよきよう

なか

おう

ゆえ

とくなり。「諸経中王（諸経の中の王なり）」の故に

のう

い

「王」と云うなり。

おんぎくでん

095 御義口伝

ごんぎよう

しようだい

勤行・唱題 1064 ページー16行

ほけきよう

だいもく

ひやくじゆう

おう

しし

ほ

法華経の題目は百獣の王・師子が吼えるようなものであり、

ほけきよういがい

きよう

ほか

けだもの

こえ

ほけきよう

法華経以外のあらゆる経は他の獣の声のようなものです。法華経

しよきよう

なか

おう

おう

は諸経の中の王であるので王というのです。

らいはい とき りよう て がっ

礼拝する時、両の手を合するは、煩惱即菩提・生死即

ねはん じようまん ししゆ そな ぶっしろう ふきよう

涅槃なり。上慢の四衆の具うるところの仏性も、不軽の

そな ぶっしろう いっしゆ みようほう らいはい

具うるところの仏性も、一種の妙法なりと礼拝するなり

095 御義口伝

勤行・唱題 1069 ページ 13 行

ふきようぼさつ ししゆ らいはい

じようまん ししゆ そな

不軽菩薩の四衆を礼拝すれば、上慢の四衆の具うるところ

ぶつしよう ふきようぼさつ らいはい

かがみ む

ろの仏性もまた不軽菩薩を礼拝するなり。鏡に向かつて

らいはい とき う かげ われ らいはい

礼拝をなす時、浮かべる影また我を礼拝するなり

095 御義口伝

おんぎくでん

勤行・唱題 1071 ページー11行

ごんぎよう しょうだい

みようおん

「妙音」とは、今、日蓮等の類い、南無妙法蓮華経と唱

いま にちれんとう

たぐ

なんみようほうれんげきよう

とな

たてまつ

まつぼうとうこん

ふしぎ

おんじよう

え奉ることは、末法当今の不思議の音声なり。

おんぎくでん

(095 御義口伝

ごんぎよう

しょうだい

勤行・唱題 1077 ページー11行)

にちれん

もんか

とな

なんみようほうれんげきよう

おんじよう

日蓮とその門下が唱える南無妙法蓮華経の音声は、

まつぼうこんじ

ふしぎ

おんじよう

しんじつ

みようおん

末法今時における不思議の音声、つまり真実の妙音なの

です。

いま にちれんとう ぐつう なんみょうほうれんげきよう たい こころ

今、 日蓮等の弘通の南無妙法蓮華経は、 体なり、 心な

にじゅうはつぽん ゆう にじゅうはつぽん じよぎよう だいもく

り。 二十八品は用なり。 二十八品は助行なり、 題目は

しようぎよう しようぎよう じよぎよう おさ うんぬん

正行なり。 正行に助行を撰むべきなり云々。

095 御義口伝

勤行・唱題 1106 ページー8行

にちれん もんか ひろ なんみょうほうれんげきよう くおん

いま、 日蓮とその門下が弘めている南無妙法蓮華経は、 久遠

がんにじよ じじゆゆうしん ひろ ほんたい こころ こんぽん

元初の自受用身が弘めるところの本体であり、 心すなわち根本と

しやくそん と みようほうれんげきよう にじゅうはつぽん ゆう

なるものです。 釈尊が説いた妙法蓮華経二十八品は、 用すなわ

さようめん なんみょうほうれんげきよう せつめいしよ ぶつどうしゆぎよう

ち作用面であり、 南無妙法蓮華経の説明書です。 仏道修行のう

にじゅうはつぽん じよぎよう

えにおいても、二十八品は助行であり、  
題目が正行です。

だいもく しようぎよう

じよぎよう しようぎよう ふく

助行は正行に含めるべきなのです。

だいもく ごじ たい おと だいもく とな  
題目の五字は、体のごとく、音のごとくなり。題目を唱え

たてまつ こえ じつぼうせかい 届 ところ

奉る音は、十方世界にとずかずという処なし。我らが

しょうおん だいもく だいおん い とな たてまつ

小音なれども、題目の大音に入れて唱え奉るあいだ、

いちだいさんぜんかい ところ たと しょうおん

一大三千界にいたらざる処なし。譬えば、小音なれども

ばい い ふ ととき とお ひび て おと

貝に入れて吹く時、遠く響くがごとく、手の音はわずかな

つづみ う とお ひび

れども鼓を打つに遠く響くがごとし。

096 御講聞書  
おんこうききがき

ごんぎよう しょうだい  
勤行・唱題  
1121 ページ 11行

まっぼう

い

いま

にちれん

とな

だいもく

ぜんだい

末法に入つて、今、日蓮が唱うるところの題目は、前代に

こと

じぎよう

けた

わた

なんみようほうれんげきよう

異なり、自行・化他に亘つて南無妙法蓮華経なり。

さんだいひほうほうじようじ

さんだいひほうしよう

(160 三大秘法稟承事 (三大秘法抄))

ごんぎよう

しようだい

勤行・唱題 1387 ページ 4 行)

まっぼう

はい

にちれん

とな

だいもく

しようほう

末法に入つて、いま日蓮が唱えているところの題目は、正法、

ぞうほうじだい

だいもく

こと

じぎよう

けた

なんみようほうれんげきよう

像法時代の題目とは異なり、自行と化他にわたる南無妙法蓮華経

なのです。

いま ほけきょうじゆりようほん たも ひと しょぶつ いのち つ ひと  
今、法華経寿量品を持つ人は、諸仏の命を続く人なり。

(164 法蓮抄 ほうれんしやう)

ごんぎやう しょうだい  
勤行・唱題 1426 ページー1行

はくば にちれん

はくちよう

われ

いちもん

はくば

鳴

白馬は日蓮なり。白鳥は我らが一門なり。白馬のなくは

われ なんみようほうれんげきよう

こえ

たも

我らが南無妙法蓮華経のこえなり。この声をきかせ給う

ぼんてん たいしやく にちがつ してんとう

いろ 増 光

梵天・帝釈・日月・四天等、いかでか色をましひかりを

盛 たま

われ しゆご たま

さかんになし給わざるべき、いかでか我らを守護し給わざ

強々思

るべきと、つよづよとおぼしめすべし。

そやどのごへんじ りんだおう こと

(167 曾谷殿御返事 (輪陀王の事))

ごんぎよう しようだい

勤行・唱題 1447 ページ 3 行)

はくば にちれん

はくちよう わたし でし もんか

はくば な

白馬は日蓮です。白鳥は私の弟子、門下です。白馬が鳴くとい

わたし とな なんみようほうれんげきよう おんじよう

こえ

うのは、私たちが唱える南無妙法蓮華経の音声です。この声を

き ぼんてん たいしやく にち がつ してんとう しよてんぜんじん りんだおう はくば  
聞く梵天・帝釈・日・月・四天等の諸天善神は、輪陀王が白馬

き き せいめいりよく ま  
のいななきを聞いて生命力を増していったようにどうして力を増

ひかり さか

し光を盛んにしないということがありましようか。どうして私た

しゆご

こころづよ おも

ちを守護しないことがありましようか、と心強く思っていきなさ

い。

く 覚 開 くらく おも あ  
苦をば苦とさととり、樂をば樂とひらき、苦樂ともに思い合  
わせて南無妙法蓮華經とうちとなえいさせ給え。これあに  
自受法樂にあらずや。

(203) 四條金吾殿御返事 (衆生所遊樂御書)

勤行・唱題 1554 ページ 12 行

くる くる さと たの たの よろこ  
苦しいときには苦しいと悟り、樂しいときは樂しいなど喜び、  
苦しいときも樂しいときも南無妙法蓮華經と唱えきつていきなさ  
い。それが自受法樂 (仏の境地) ということではないでしょうか。

ごふしん

ほけきよう

ほん

さき

もう

ただし御不審のこと、法華経はいずれの品も先に申しつる

おろ

こと

にじゅうはつぽん

なか

すぐ

ように愚かならねども、殊に二十八品の中に勝れてめでた

ほうべんぽん

じゆりようほん

はべ

よほん

みなしよう

そうろう

きは方便品と寿量品にて侍り、余品は皆枝葉にて候な

つね

ごしよさ

ほうべんぽん

ちようぎよう

じゆりようほん

り。されば、常の御所作には、方便品の長行と寿量品

ちようぎよう

なら

よ

たま

そうら

べつ

か

い

の長行とを習い読ませ給い候え。また別に書き出だし

そうろう

そうろう

よ

にじゅうろつぽん

み

かげ

てもあそばし候べく候。余の二十六品は、身に影の

したが

たま

たから

そな

じゆりようほん

ほうべんぽん

読

随い、玉に財の備わるがごとし。寿量品・方便品をよ

そうら

じねん

よほん

そうら

そな

そうろう

み候えば、自然に余品はよみ候わねども備わり候な

り。

(  
234  
月水御書 がつすいごしよ

勤行 ごんぎよう・唱題 しょうだい

1646

ページー3行)

くに ほうぼう こえあ ばんみんかず げん いえ さんきよう  
「国に謗法の声有るによつて万民数を減じ、家に讃教の

つと しちなんかなら たいさん  
勤めあれば七難必ず退散せん」

（283 南部六郎殿御書 なんぶのろくろうどのごしよ）

ごんぎよう しようだい  
勤行・唱題 1807 ページー11行

しょうにん とな たも だいもく くどく われ とな もう だいもく

聖人の唱えさせ給う題目の功德と、我らが唱え申す題目

くどく

ほど たしょうそうろう

うんぬん

の功德と、いか程の多少候べきや」と云々。さらに

しょうれつ

そうろう

勝劣あるべからず候

まつのどのごへんじ

じゅうしひぼう

こと

(374 松野殿御返事 (十四誹謗の事))

ごんぎよう

しょうだい

勤行・唱題 1987 ページ 8 行

しょうにん とな

だいもく

くどく

わたし

とな

だいもく

くどく

聖人が唱えられる題目の功德と、私たちが唱える題目の功德

ちが

しつもん

とでは、どれほどの違いがあるのでしょうか、とのご質問ですが、

だいもく くどく

しょうれつ

題目の功德には、まったく勝劣はありません。

ほとけ な そうろう べつ よう そうら なんみょうほうれんげきよう

仏に成り候ことは別の様は候わず。南無妙法蓮華経と

たじ とな もう そうら てんねん さんじゅうにそうはちじっしゅこう

他事なく唱え申して候えば、天然と三十二相八十種好を

そな われ ひと こと

備うるなり。「我がごとく等しくして異なることなし」と

もう しやくそんほど ほとけ 易々 な そうろう

申して、釈尊程の仏にやすやすと成り候なり。

にいけごしよ

(400 新池御書

ごんぎよう しょうだい

勤行・唱題 2068 ページー1行)

ほとけ とくべつ

仏になるということは特別なことではありません。ただ

なんみょうほうれんげきよう とな

南無妙法蓮華経とほかのことをさしおいてひたすら唱えていくなら

しぜん せいめい ほとけ そう さんじゅうにそうはちじっしゅこう

ば、自然に生命に仏の相である三十二相八十種好をそなえてい

ほけきょうほうべんほんだいに

わごとひと

こと

けるのです。法華經方便品第二に「我が如く等しくして異なること

な

しやくそん

ほとけ

無からしめん」とあるように、釈尊のような仏にやすやすとなつ

ていけるのです。

ほけきよういちぶ かんじん なんみようほうれんげきよう だいもく そうろう  
法華経一部の肝心は南無妙法蓮華経の題目にて候。

ちようせきおんとな そうら まさ ほけきよういちぶ しんどく

朝夕御唱え候わば、正しく法華経一部を真読にあそばす

そうろう にへんとな にぶ ないしひやつぺん ひやくぶ せんべん

にて候。二返唱うるは二部、乃至百返は百部、千返は

せんぶ ふたい おんとな そうら ふたい ほけきよう よ

千部、かように不退に御唱え候わば、不退に法華経を讀

ひと そうろう そうろう

む人にて候べく候。

407 みようほうあまごぜんごへんじ いくかんじん こと  
妙法尼御前御返事（二句肝心の事）

ごんぎよう しょうだい  
勤行・唱題 2099 ページ 8 行

ほけきよういちぶはっかんにじゅうはっぽん こんぽん なんみようほうれんげきよう だいもく

法華経一部八卷二十八品の根本は、南無妙法蓮華経の題目で

あさゆうだいもく とな ほけきようにじゅうはっぽん

す。朝夕題目を唱えるならば、まさに法華経二十八品のすべてを

ほんとう いみ よ

本当の意味で読まれてことになるのです。

だいもく にへんとな

題目を二遍唱えれば、

ほけきようにじゆうはつぽん にかいよ

ひやつぺん

ひやつかい

法華經二十八品を二回読んだことになり、百遍であれば百回、

せんべん せんかいよ

たいてん

千遍であれば千回読んだことになります。このようにして、退転せ

だいもく とな

ふたいてん ほけきよう よ ひと

ずに題目を唱えていくなれば、不退転に法華經を読む人になるので

す。